

第一章 はじめに（部長挨拶）

この度は、2025 年度一橋鉄研研究誌をお手に取っていただき誠にありがとうございます。本年度の一橋鉄研を代表し、部長の神井よりご挨拶をさせていただきます。

本年度の研究誌は「続・鉄道貨物輸送の今-2025-」と題し、鉄道貨物輸送に関する考察を行いました。タイトルの通り、この研究誌は 2009 年度研究誌「鉄道貨物輸送の今」の続編と位置付けています。前作（と呼称させていただきます）が 2009 年時点での鉄道貨物輸送の様態を丁寧に考察した名作であることに疑いの余地はありません。しかしながら、刊行されてから 16 年の時が経ち、日本の物流を取り巻く環境は大きく変化しました。特筆すべき変化は、本研究において幾度となく登場することになる「2024 年問題」でしょう。2024 年問題とは、トラックドライバー不足が叫ばれる中で、トラックドライバーの時間外労働が年間 960 時間に制限されることによって、自動車による貨物輸送能力が低下するという問題です。この問題は、運輸業界に対して自動車に依存した輸送体制からの脱却を要求するものでした。加えて、近年はますます環境負荷の低減が急務となっており、これは日本の CO2 排出量のうちおよそ 20%を占める運輸業にとっても重要な課題となっています。

このような状況下で、運転手一人当たりの輸送量が大きく、輸送量当たりの環境負荷が低い鉄道貨物輸送の存在感は、以前にもまして増えています。そして、鉄道貨物に限らず、物流業界全体が変革を迫られている今、2009 年に一度扱ったテーマについて再検討することは大いに意義のあることであると考え、このようなテーマ選定に至りました。

重ねてになりますが、物流業界は現在変革のさなかにあります。つまり、この研究誌に記された内容も、いつかは古い情報となってしまうことが決定づけられているのです。タイトルの末尾に-2025-を付した理由には、未来の一橋鉄研部員、ひいては読者の皆様の手で、さらなる続編を制作していただきたいという願いが込められています。

本誌が示すのは、あくまでも 2025 年現在の状況と展望です。だからこそ、5 年後、10 年後に読まれたとき「意義深い研究である」と感じていただければ、これほど幸せなことはありません。

末筆とはなりましたが、日ごろより弊会の活動にお力添えを頂いている如水鉄路クラブの皆様、ならびに本研究誌をお読みいただいているすべての皆様に対し、厚く御礼を申し上げます。

2025 年度一橋大学鉄道研究会部長
商学部 2 年 神井 凜